

藤 沢

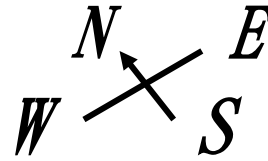
エコネット

藤沢環境運動市民連絡会議

(略称) 藤沢エコネット

2018年10月1日

第293号



主
な
記
事

- ・「高齢者避難開始」行動の決断
- ・海から見える地球
- ・「福島は語る」 ・環境フェア予告
- ・辺野古のサンゴは回復するのか

<http://econet2015.sakura.ne.jp>

事務局 e-mail: aoyagipc@jcom.home.ne.jp 青柳

☎ F A X 0466-87-4922

縄文時代に学ぶ自然との共生

今年の8月、東京国立博物館で縄文時代の特別展が行われ、多くの参観者で溢れたと報道された。

縄文時代は紀元前1万5000年頃から紀元前3000年頃までの稲作農業が日本に伝わってくるころまでの時代を言うが、1万年もの間、縄文時代の人々はどのような暮らしをしていたのか調べてみた。

学校の教科書では、縄文時代の人々は、主に竪穴住居に住み、弓矢を使って狩猟をしたり漁労、採取の生活を営んでいたと教えている。しかし、1万年もの間、同じ所に住み、狩猟や漁労、採取だけで縄文時代の人々が生活し続けられただろうか。狭い地域では獣や魚、クリやドングリだけではすぐに食い尽くしてしまうだろうに。

私の田舎の長野県富士見町に井戸尻考古館という縄文時代の土器や生活用品を展示した博物館があるが、そこに1万年もの間、当時の人々が、どんな暮らしをし続けてきたのか、その遺物が残されている。井戸尻遺跡の展示物が物語っているのは、縄文時代、人々は、狩猟や漁労、採取だけでなく、アワやヒエ、ソバなどの穀物を栽培し、その収穫物も食べていたということである。つまり、あまり教科書には出てこないが、縄文時代にも原始農耕が始まっていたということである。博物館に展示されている多くの土器の壺はその収穫物を貯蔵したり煮炊きしたりする道具であり、矢尻は狩猟、石鍬や石鋤は原始農耕用の道具に他ならない。縄文時代の人々は、自然と共生し、自然の恵みを得て1万年もの生活をしてきたのである。

今、あちこちで自然破壊が行われているが、自然との共生なくして人類の歴史は続けられないのではないか。辺野古の海を埋め立てて基地を作ってしまうと、2度とサンゴ礁の海はかえって来ない。原発事故の廃棄物を埋めた場所では1万年もの間放射能を出し続け、人の住めない場所に変えてしまう。しかし、現代に生きる我々が、太陽光や風力などの自然エネルギーを使えば自然から電力を調達することが出来るのである。1万年以上もこの日本列島に住み、美しい自然を残してくれた縄文人に見習って、放射能や温暖化でこの地球を壊してしまうことのないように、自然を守り次の世代の人々に美しい地球を残すのが現代の我々の務めではないか。

(小林 麻須男)



写真は、井戸尻考古館に展示されている縄文時代の土器や矢尻、農耕用石器

「高齢者避難開始」の発令 - どのように行動を決断するか

この原稿を書いている9月初旬、台風21号が徳島県に上陸し北北西に進んでいる。非常に強い勢力のまま上陸したのは25年ぶりだ。今年の上陸数はすでに4個で、この夏、どれだけの雨が日本列島に降ったことだろう。

7月下旬には、東から本州を横断する珍しい進路の台風12号が現れた。関東地方の南岸を西に向かい、三重県に上陸した。県内では接近に伴い、7月27日夜半から降り出した雨は29日にかけて1時間に30ミリを超える激しい雨となった。アメダス相模湖では208.5ミリに達した。

藤沢市では、28日午前にも暴風警報と波浪警報が、29日未明に洪水警報が発令された。

これに伴い、避難準備・高齢者等避難開始が発令されたのである。ここで、避難準備、避難勧告、避難指示の順番に強制力が高くなる。

そうした経緯のなかで、友人達と連絡をとりつつ神奈川県雨量水位情報の引地川と境川の河川流量の推移を注視していた。高齢者等避難開始をどのように受け止めて行動すべきか、決断する必要があるためである。

境川の河口付近に住んでいる母を避難させるか否かの判断が必要だった。雨量水位情報は、水位の変化をグラフで示している。また、現在の河川水位がどの程度危険な状態にあるのかが判読できる。

私は迷った末に、避難することはさせなかった。境川は増水したものの、水防団待機水位にも達しなかったのである。一方、引地川では境川より危険な状態だった。

藤沢市全域を対象とした避難指示であっても、流域によって危険度は異なる。既存の情報を最大限に利用して、各自で避難行動を決めることが重要ではないだろうか。

母の場合に限らず、避難すること自体に大きな危険を伴うことが、実際にあり得るだろう。

林 陽生 (NPO - CWS)



海から見える地球

9月9日、「湘南のなぎさを守る藤沢市民の会」主催の講演会が開かれました。主な話を聴いてきましたのでその概略を記します。

講演のテーマは「海から見える地球」で講師はプロダイバーの武本匡弘（まさひろ）さんです。武本さんは「私は化学者でも研究者でもありませんので『目撃者』としての報告をします」と前置きをし、自ら操船して太平洋23,000キロメートルを航海してきた見聞を映像とお話で披露しました。

まず、航海中、一番目にするのは水面に漂う漂流物だそうです。小笠原諸島・父島の浜にはゴミが大量に打ち上げられていました。漁網、これが船のスクリューに絡まると大事故になります。まさに凶器です。瀬戸内海でカキ養殖に使われているプラスチックの筒製漁具が、こんなに遠く離れたところに流れ着いているのは驚きです。

パラオ・ベリリュー島のビーチは無数のゴミであふれ、砕けたプラスチックが砂浜を覆っていました。先日、鎌倉の海に打ち上げられたクジラのおなかの中は、プラスチックでいっぱいだったそうです。

マイクロプラスチックという言葉聞いたことがありますか？ プラスチックが細かく砕かれ、マイクロメーター（ μm =1,000分の1ミリ）の粒子になったものを言うのだそうです。この目に見えないほど小さなプラスチック粒子が魚の体内に入り、その魚を私たちが食べているのです。体内に入ったプラスチックは、溶解して化学物質になり、人の体を害します。

また、このマイクロプラスチック粒子は、歯磨きや洗顔クリームにも添加されていて、研磨材の役目をしているのです。これらは皮膚から体内に浸透し、健康被害を及ぼす可能性があります。怖いですね。

また航海中、地球温暖化も体験されました。なんと太平洋の海水温が31℃にもなっているのです。信じられません。

最後に加藤なを子県会議員が、境川の除塵機が壊れても更新しない県政の状況、神奈川県のパラスチックごみに対する取り組みを報告されました。

「湘南のなぎさを守る藤沢市民の会」本阿弥 光彦



(土井敏邦監督)

藤沢から活動仲間 4 人で横浜磯子教会に「福島は語る」ドキュメント映画と、土井敏邦監督のトークショーに出席した。小さな教会のホールは 70 人ほどの人で埋っていた。映画は証言ドキュメンタリーで気が

抜けず、グイグイ話に引き込まれた。「避難」「仮設住宅」「悲憤」「農業」「学校」「抵抗」「喪失」と最終章「故郷」の八章からなり、被災者の淡々とした証言が続く。食い入るように言葉に聴き耳をたて、表情を見続けた。帰還困難区域となった飯舘村・長泥で、家・農地・石材工場総てを失った、もの優しい老人は語る。しかも物静かに話す。それに追い打ちをかけるように、将来に絶望した跡取り息子を自死に追いやる。原発事故で「人生を狂わされた事実」を静かに語る“言葉”に没頭した。

また住民の「人生全てを知る」故郷。「汚染されても変わらない」美しい故郷。原発事故が故郷に突き付けた“故郷”の意味とは！このラスト二章が特に私の心に深く突きささる。

2015 年ノーベル文学賞を受賞したスベトラーナ・アレクシェービッチ著「チェルノブイリの祈り」を読み、土井監督は、この映画をつくるきっかけになったと話す。派手な動きもなく、長い語りだけれど、見に来てくれた人が最後まで席を立たなければ、この証言だけで意義がある。

トークショーと合わせて 4 時間、監督のジャーナリスト的な眼の鋭さに、驚きっぱなしの一日だった。「チェルノブイリの祈り」（岩波現代文庫）是非読んでください。（国枝 健）



映画「おだやかな革命」

それは、もう始まっている。しなやかに生きるために！！自然エネルギーによる地域再生。これからの時代の「豊かさ」を巡る物語。

原発事故後に立ち上げた会津電力、放射能汚染による飯舘村の飯舘電力、岐阜県郡上市石徹白、集落の存続のために 100 世帯全戸が出資した小水力発電の取り組み。それぞれがエネルギー自治を目指すことで、お金やモノだけでない。生きがい、喜びに満ちた暮らしの原風景が生まれている。成長・拡大を求め続けてきた現代社会が見失った、これからの時代の「豊かさ」を静かに問いかける物語で今、話題になっています。

日時：10月28日（日）

①10:00～ ②14:30～ ③18:30～

②上映のあとアドバイザー高橋真樹氏のトークあり。
開場は上映の 30 分前

会場：茅ヶ崎市役所分庁舎

①：5F AB 会議室

②③：6F コミュニティーホール

①は、会場内にお子様用スペースがあり、会場を明るめにしてあります。

主催：NPO ちがさき自然エネルギーネットワーク・
湘南生活クラブ茅ヶ崎コモンズ環境委員・チームみつばち
前売 800 円、当日 1,000 円、高校生以下無料

申込み：090-9328-3799（亀田）

第 23 回ふじさわ環境フェア Eco²まつり 2018 「Cool な未来」

日時：11 月 24 日（土）9:50～15:30

会場：藤沢市民会館

主催：藤沢市・ふじさわ環境フェア実行委員会

この夏は記録的な猛暑が続きました。いよいよ地球温暖化対策は待ったなしです。藤沢市長は今年 5 月 9 日に COOL CHOICE 推進を宣言しました。

「クールチョイス」とは、省エネ・低炭素型の製品・サービスなど地球温暖化対策に資するあらゆる「賢い選択」をしていこうという国民運動です。

実行委員会は準備を重ねてきました。藤沢エコネットは DVD「2100 年 未来の天気予報」などの上映を企画、「藤沢市の未来」について多くの市民と共に考える機会としましょう。（同企画運営委員 宮地俊作）



辺野古のサンゴは回復するのか？



写真は2016年の辺野古の姿です。残念ながら白化した後、死滅、現在は瓦礫と化しています。昨年、数少ない

台風の接近により特筆すべきことは、白化していない健全個体までが波浪で剥離して埋没してしまった事です。

これは、新基地建設運搬道路護岸による地形変化に伴う「波浪反復影響」の変化もあり得ます。直接サンゴ礁に土砂を流すような埋め立て工事ではない、だから大浦湾内であっても離れた箇所でのサンゴには影響はない、というようなアセスは当然防衛省側の御用学者の詭弁。史上最悪のアセスメント(環境影響評価書)とされています。

言いにくいことですが、新基地建設の影響は出ている。気候変動と言う大きな力でダメージを受けているサンゴに“とどめを刺す”ようなことになってしまっています。残念ながら、私や、仲間のダイバー(地元)などから見て現在の状況は6割がた死滅、強い種はかろうじて残ったとしてもその様相は大きく変わってしまうものと予想しています。

また、埋め立て工事を行う海域に生息し、絶滅が危惧されているサンゴなどに関しては移設(サンゴの移植)して保護するとの事ですが、これは、全く話になりません。この方法は保全措置にはなり得ないし、例えば移植しても生存率は10%に満たない、というデータも出ています。月刊誌「世界」(2017.12)に掲載された大久保奈弥(東京経済大・さんご生物学)による画期的且つ勇気ある発表です。

武本匡弘(日本サンゴ礁学会会員)

放射能測定値(市民計測)

(HORIBA Radi) 単位($\mu\text{Sv/h}$) 地上 50cm

9/11 善行6丁目商店駐車場 0.041

9/11 六会駅バス乗場 0.043

ECONET INFORMATION

▲ソーラーシアリング講演会

地域から生み出す自然エネルギー
あつぎで太陽光発電を広めよう!

・講演 吉原毅さん(城南信用金庫顧問 原発ゼロ自然エネルギー推進連盟会長) ・映画「日本と再生」ほか
10月18日(木) 18:30-

厚木市文化会館 小ホール

主催/問合せ(一社)厚木市民発電所 080-1010-4759
無料チケット申込み 046-224-9999

▲「遺伝子組み換えルーレット」

DVD上映と総会

10月24日(水) 10:00~

場所 村岡公民館

主催: 武田問題対策連絡会 080-5099-4264



▲福島原発事故の食と農への影響

~私たちにできること~

講師 小林信一教授

日時 11月4日(日) 13:30~15:00

場所 日本大学 博物館第1会議室

主催 日大生物資源科学部動物資源科学科
小林信一研究室

福島の子どもたちとともに・湘南の会

問合せ/申込 090-2527-3200

Eメール aoyagi6090@gmail.com

▲藤沢エコネットから

◆学習会

「藤沢の地産地消エネルギーの現状と課題」

10月12日(金) 10:00- 藤沢市民会館 教養室

講師 藤沢市担当職員 どなたでも参加できます

◆会員募集 年会費・購読料→2000円

ゆうちょ銀行 (9900) 店番 (029)

当座預金 0046501 77 7777

◆事務局会議 10月6日(土) 13:30~

市民活動推進センター



《編集後記》9月6日突然の北海道地震にマサカ! の衝撃を受けた。外国から観光に来ていた甥一家が札幌で避難所生活となり、他人ごとではなかった。停電、断水、道路、交通などで日常生活は奪われた。3.11以後の教訓はどこへいったのか。怖さを知っているのにまた電源喪失が続いた。各地で起きる地震に台風、先ず身の安全、防災対策をいつも各自でしていなければならない。(H)